

半
化
坊
發
句
集

風曉夢を破て、遊子關を越んと聞へしも、實や我半化翁も、其はじめは中頃の風に遊び、加の淺野川の二夜庵に三とせあまり結びたる夢も、古調の爲に破れ、終に深雪ふる越路に立出て、

苦しさに休めば蛸のたかりけり

姨捨や石に置身も月のため

漏ざるをたのみぞ雪の薦かぶり

など風吟し、客中に年を越て、霞たつ春は都の花にうかれ、ほととぎすの一聲は淀の渡りに聞、月の清きには須磨の浦をたづね、橋立の詠には無季の格もしからんと、

橋立や守神なくば波越ん

かくいひ捨て、暫く此邊りになん周流せられける。とりが啼あづまの方もしたはるゝ折からは、甲信の音信に笠をかたぶけて、此間に年をかさね、ふたゝび武城に二夜庵をいとなみ、漂泊の勞を養れけるが、例のうかれ心より、しらぬひの筑紫が見まゝくほしと、又もや都にかへり給へば、したしき人ゝの杖をとり笠をかくすに任せ、市中に居をしめられしが、名利のさはりもあればと、東山にかくれて、故翁の、

柴の戸の月や其儘あみだ坊

と聞えしさびをつぎて、南無庵の古しへを慕ひ、其地に芭蕉堂を結び、閑ならん事を願ふといへども、門人遊子日々につどひ來り、閑居のいとまもなきに、うかれ神の立さらでや、ある日は湖邊に吟ひ、或時はいせ路をたどりて、何ひとつ書集たる句もなかりしが、年頃よみ捨られし種々を拾ひつゞりて、好士の爲にもやとおもふ折ふし、予が同友の車蓋、東行脚のかへるさ、四山に一囊をひらき、師の句ある事を告る。そが中に、

三月の片羽でありく浮巢哉

仰向て水のうら見る天の川

宵闇沈く眠らんとすれば月我にてる

星石と成秋天高く風あるゝ

是等の舊作をはぶくといへども、ともに聞知れる句をかぞふるに千餘章に及ぶ。しかはあれど、多きは紛るゝ事もあらんなれば、纔にあつめて、滿ればかくるのとはりもあればと、餘は後篇にゆづるにはしかじと、

四山亭の瀑布水秃筆をふるふ。

于時天明丙午春

半化坊發句集 上

立春

狐狸屈仙一樹有。其大ひなる
事は

海も山もみな下蔭やはなの春

元日や此心にて世に居たし

元日と思ひの儘の朝寐かな

見る物は先朝日なり花の春

元日や松靜なる東山

正月や三日過れば人古し

正月や皮足袋白き鍛冶の弟子

當年は東西に行脚の志有ければ

我恵方多し松しまいつくしま

梅

梅が香やおもふとなき朝朗

梅咲や藪に捨たるすみだはら

山蔭や畑の中にむめの花

折盡す鬼もなき世ぞ野路の梅

軒の梅イば犬の吼にけり

村はしや竹につらなる梅椿

日の影や我肉ゆるぎ梅が下

夕暮や飼猿下りて梅の月

梅の月消へて窓もる匂ひかな

折音は誰ぞや寐覺に梅匂ふ

梅咲て門は海老やくにほひ哉

臥龍梅

角たれて香に眠る梅の形かな

若菜

若菜野や赤裳引づる雪の上

筐もる雪も若菜の野末哉

鶯

黄鳥や起れば枝に狂ひ居る

鶯やひとくと啼て籠の内

朝朗去年の鶯啼にけり

黄鳥の鳴かで來にけり臼の上

鶯やうぐひす來啼餌搦鉢

うぐひすや谷の下音を聞初る

黄鳥の初音聞らんほとゝぎす

松

靜さやゆふ山まつの若みどり

あらしにも直なる松の緑かな

柳

青柳や酢賣の潜る門の内

釣人の蛸堀けり柳かけ

舟留て語や鵲の柳かけ

透し見る舟景色よし江の柳

二本の柳吹結ふ風情かな

遠里や柳一もと打曇る

霞

海の日半見るよりうす霞

山霞み海くれなゐのゆふべかな

春の雪

都邊や小袖に消ゆる春の雪

春もまだむなしき雪の田面哉

日晴ては燃るがどし春の雪

春の雪仰向うちの眺かな
白波となり行磯の雪解哉
雪解迄は往來の踏し野竹かな
雪消へて麥一寸の野づら哉

春風

春風に雪踏ぬらすや東山
はるかぜや草木に動く日の光り
春風や肩に乗りふりつゝの光ふりつゝ

春日

春の日や夕賑ふ海の幸
春の日や鷗ねぶれる波の上
脱捨し田簀に春の日影哉
薪盡て門を出れば春日哉

雉子

草による駒驚かす雉子哉
顔かくす雉子に日のさす野中哉
何事の寐覺なるらん夜の雉子
聲たてゝ水飲む谷の雉子かな
雉子啼てゝらなき町としられけり

目を覺す雉子も有らんきじの聲
曙や里はくだかけ野は雉子
飛退て雉子啼けり野への杭
雉子のみ臺らぬ雨の野面かな

雲雀

月に啼心はなき歎夕雲雀
雲雀啼て三つの光も見る日哉

駒鳥

駒鳥の日晴てとよむ林かな
高ノと駒鳥啼けり夜の松

蛙

月の夜や石に登りて啼蛙
山里や盪の中に鳴蛙
並び居て歛にかゝるな田の蛙
腹動く蛙にうつる夕日かな
蛙啼田の水うごく月夜哉
夕雨や水田溢てとぶ蛙
山もとや蛙啼江も家の間
むし追て日南へ出たる蛙哉

今土を出てまじくと蛙かな
蛇は串にさゝれて啼蛙

地虫

行とく春の日影や虫の穴
今出し地虫哀れめ道の中

蝶

風止て蝶の出て來る野原哉
木々小草いろくの中に黒き蝶
ぬるゝ日をそこねもやらず蝶の羽
蝶飛や小狐狂ふ岡のはら
日の影や眠れる蝶に透通り
川波やあやふく越る蝶も有
道のべや馬糞の胡蝶花の蝶

陽炎

陽炎やはかなきと見る人もなし
かげろふや消へてはもゆる波の隙
陽炎の外は動かぬ景色哉
かげろふは眠る狐の魂なる歟
陽炎の跡に氣を吐守宮哉

陽炎や黒きをもゆる灰汁の精
糸遊いとあそによるづ解行とくぎやう都哉
糸遊の亂くて靜也

臘月

興盡て山下る暮の臘かな
臘夜やみなあらはれし月ながら
有明や臘は消えて立烟
春の夜や月に移れるさざれ波
おぼろ夜や淡路の灯岸の松
築地より風匂ひけり臘月

春雨

春雨やのたゞ歸る孕鹿
春雨や土あらはれし北の山
春雨や編笠着たる物囃もひ
春雨や曉晴て花一つ

涅槃

古寺や泪に兀るねはん像
かゝる世に出ても説ず涅槃像

蜂

六尺の人追ふ蜂の心かな
似我蜂や己が姿もかへり見ず

田打

鋤鎌も今を春邊の田面（畑カ）かな
艸くさの根を逆さまに田打哉

春の雁

つくぐと海見て居るや春の雁
砂はむと浦人いへり春の雁

堅田に至りて、故翁の吟をお

もふ。

病雁も残らで春の渚さかな

猫戀

一ツ家の猫も啼ゐる春邊哉
けふははや忘れにけりな猫の妻

菜の花

菜の花や遊女わけ行野の稻荷
菜の花や千里をくまに咲續

董

うつくしき道有世也すみれ草
董野やいざ胡坐して笛籟ん

ぬしや誰垣よりうちも董のみ
鳥巢

鳥の巢となしけり妹が爰の落
鳥の巢や或は木蔭かげの蔭
鳥の巢や梅うのはなもしらぬ内
こゝろこめて巢作る鳥敷ふの奥
鳥の巢やひとつ太きはほとゝぎす

桑子

我儘に遣はで飼るゝ桑子哉
太布の袂に馴るゝ桑子かな

櫻

櫻咲これぞ和國の景色哉
入山の櫻咲たつ朝日かな
御車や櫻が下の牛の聲
根をよけて火焚け櫻に狂ふ人
世を捨る山陰もなきさくら哉
行暮て櫻にむせぶあらしかな
酔覺て起れば月の山さくら
したはしきものや櫻に白拍子

礧山や櫻過行釣小舟
雨の日や旅人越る櫻山
散かゝる櫻抱けり酒の酔
戻りなば人にも告ん初さくら
糸さくら身にふるゝ日はあらし哉

知恩院に至りて

町中に櫻分入るや知恩院
散さくら我酔顔に冷たかれ
散果し櫻に啼や山がらす

御室にて(二四)

櫻にも人にもうつる心かな
我くも花に袖する御室哉
一日もかけずに来てや散さくら
はじめて花供養いとなみて

活て居て望の日の花備へけり
櫻咲さくら散つゝ我老ぬ

芭蕉堂にて

時なれや花の中なる翁堂
花戻り錢落したる坊主哉

夕暮や花に猪追ふ嵐山

ふたゝび嵐山にいたりて

花に並ぶ松風光る夜と成ぬ
雨そぼく花の梢に猿の尻

故翁の吟を思ふ

湖てるやまた吹入ぬ四方の花

脚下清風にまかせて、東關の方

に葛坡君を携ふ車蓋を送る。

道のため花に寐初よ岩まくら
いろくに見するを花ぞ不二の雲

山吹

山吹や終には流す花のかげ
山ぶきや花ふくみ行魚もあり
やまぶきの花の下ゆく芥かな
やまぶきや暫しかけ置洗ひ衣

郷路

逆さまに咲や端山の花つゝじ
夕山を根こちて戻るつゝじ哉

雜

若草や白をころがす翁有り

柴垣や匂ひゆかしき蕪茗荷

〔芭蕉堂三代集〕夏之部に組
入れたリ

藪かげに延過しけり蔭の蕪
青海苔や葭籬に付し蟹が軒
春の野や鳥うつ人に我うとき
鞘赤き長刀行や春の野邊
川越て鳥の見てゐる燒野哉

川中島にて

川しまやつばな亂れて日は斜

兩國なる遊水樓にて

橘長し人多し賞春日哉
ゆふべく靜まる春の心かな
驚かぬ風渡りけり春の暮
海棠や戸させし儘の玉嚢
隠家や梨一もとの花曇(盛)哉
岩端や五六寸なる藤の花
摘くて人あらはなる茶園哉
田樂に土焦したり春の庭

旅人の米ほしがるや里の春
大津肅の鬼も佛も春邊哉
夕川や鱒にうたれし獺の聲
櫻過菜の花越て金閣寺
鶏のよこれ來にけり春の水
あかねさす藪を出けり春の水
底のなき柄杓流れて春の水

留別

いざ行ん魂花に染(消カ)るまで
寒州に訪れて

春雨や老鳥は時に眠るのみ

留別

ほどもなく又歸り來ん彌生山

桃里亭に杖をとむる事三度

留主に來ても居よき花の軒端哉

養老亭に遊ぶ事三日

起ふしに眺る春の野山かな

棧谷亭を訪ふ

鳥啼て谷間も春の木立哉

眞蝶が本腹を賀して

春の日や風におそれぬ床ばなれ

病中の吟

瘦骨に梅が香うつる朝かな

夏

更衣

抜し綿や鼠の巢ともなさばなせ

寐て見れば疊のかたき衾かな

晝過や何もせぬ身の更衣

客中更衣

きれゝの綿流さばや衣がへ

更衣我にも着する主かな

初夏

産湯かけし佛にうつる朝日哉

九日の躑躅しはびし卯月かな

高からぬ花となり行卯月哉

蚊の聲もうつ心なき四月かな

旅行

山陰や蔭の廣葉に雨の音

青葉若葉下は玉ちる岩の水

時鳥

畫も啼里には聞ずほとゝぎす

伊勢にて

蘆原や神代はしらすほとゝぎす

時鳥啼戻りけり山かづら

ほとゝぎす古き言魂思ふのみ

待甲斐有二羽啼過るほとゝぎす

郭公聲有かけの地を走る

ながなけとおだまきくる歟杜宇

各嶽山に登りて

俳諧の羅漢ならべりほとゝぎす

室の津

室の津や千舟啼越すほとゝぎす

我がわれをうらやむ去年の時鳥

ほとゝぎすなかでさへよきに鳩の海

閑居鳥

大寺や京に來て啼閑居鳥

胸をうつ思ひぞ旅のかんこ鳥

山もとや市にきこゆるかんこ鳥

啼井ぶ友どりにかに閑居鳥

閑居鳥ましらも叫ぶ小雨かな

いまだ白頭の雲水にもあらね

ば

なまなかに耳も聞へてかんこ鳥

蚊喰鳥

雨の夜や軒下かける蚊喰鳥

牛吼る窓飛さるや蚊喰鳥

牡丹

花にまけて花も俯向牡丹かな

白牡丹只一輪の盛りかな

芥子

二三本芥子作りけり弱法師

敵にけり芥子のみに吹風も有歟

白芥子の花透朝日夕日哉

まだ咲ぬ芥子倒しけり柱賣

〔三傑集〕「芭蕉堂三代集」其

に「まだ散らぬ芥子倒しけり

階子賣」とす

芥子咲て狐の俣入月夜かな

百合

星の夜も月夜も百合の姿哉

百合の花畫の姿はなかりけり

俯向し百合に雨降垣根哉

葱草

葱釣軒に寄添ふ女かな

釣葱いづくの岩を離來し

嵯峨も今酒賣軒の釣葱

菰

古寺や菰の下の狐穴

隣にはかなぐり捨し菰哉

小北山にて

聲あはれ菰の奥の梓弓

葵

くれ行や日陰の葵花直し

日に動く葵まばゆき寐覺哉

髭づらに葵かけたる祭かな

神の葵地にかへされぬ後宴哉

若竹

竹子や月を左右へ吹なびき

竹の子もほど有らじ土のわれにけり

簀やわけて今年の色緑り

若竹やふしみの里の雨の色

今年出し竹もかたまるあらし哉

節句

十万の軒やいづこのあやめ艸

四辻や匂ひ吹みつあやめの日

客中節句

分越し笹を粽に見る日かな

夏艸

夏草や所／＼にはなれ駒

奈古跳壁

夏艸もはつかに浪の汀かな

川中島

川嶋や夏かれ草に鳥の糞

五月雨

さりながら雨くらからぬ五月哉

ひた／＼と着物身につく五月雨
漸有て又登りけり五月雲
山寺や軒の下行五月雲

田植

田植歌中／＼古き詞有り
蛭泳ぐ中にも馴て田植ける

蝸牛

登りつめて落たり竹の蝸牛
道渡る式部が筆やかたつぶり

火串

角も牙も今朝哀なる火串哉
曉は土にもへ入火串かな

水雞

敵ともきかじ野川に啼水雞
溜池や漬木のうへに水雞啼
曙は水門潜る水雞かな
仰向て啼か水雞も月の下

螢

更行や螢地を這ふ町の中

草うてば螢亂るゝ古江哉
飛螢舟に扇を揚にけり
碎よと打さるものを螢かな

蚊

團車の子の門に泣ゐる蚊遣かな
釣侘て水にぬれけり舟の蚊帳
蚊の聲のむら竹洩るゝ烟りかな
蓬生や君がためとて焚蚊遣
下蔭や紙帳の中に鉦の音

水鳥の巢

つゝかれる迄魚のよる浮巢哉
ゆられ／＼終には鳩も巢立けり

夏虫

片羽燃て這あるきけり夏の虫
筆留て打拂ひけり火取虫

蟬

はつ蟬の今這登る榎かな
所／＼啼さす蟬に照日かな
蟬啼て杉にも脂の流れけり

團

軒に立て裾叩ゐる團かな
水うつてあふぐもよしや遊團

兩國にて

金銀のうちわつらなる小舟哉
日の影をおさへてねぶる團哉

川狩

川狩や君と匏笥岩の上
川狩や魚串立る石の間

鷗

つく／＼と鷗の留りけり魚の籠
鷗の面に川波かゝる火影哉

畫貌

畫顔やきのふの花は日に焦れ
畫がぼや花吸ふ虫も飛かへり
畫貌は日のそみかゝる色なる歟

夕顔

夕顔や花より外はわきがたき
夕がぼや無似氣人の里わたり

夕がほや鼠の傳ふ軒のつま

涼

あら涼し眠るためなる月の下
ひとり居れば涼みの留主も涼しけれ
涼風に眠り上戸のうねりけり

暑

ほくち搦臼のわれのく暑哉
暑き日や降ればふるぞと云ながら

雜

目覺けりうつゝに打し顔の蠅
繭葦や身をかざるべき事でなし
夏川や馬繋おくみをつくし
夏川や岸に漁火の燃残り
夏川や筑抱へてゆく女
慰に川渡りけり夏の月
馬柄杓の錫そゝぎ行清水哉
大木を見てもどりけり夏の山
たぐひなく夏の山水を見る日哉
神子村や椿の下の紅のはな

右左四角に麻の茂みかな

丹波路や綿の花のみけふもみつ

君とよむ竹にも啼やぎやうくし

夏の夕吹倒さるゝ風もがな

日盛りや半べ曲りて種胡瓜

山かけやふるめ童の蓬つみ

水無月や屋根なき舟に身を焦シ

水無月の限りを風の吹夜哉

草津にて

六月やいたる所みな温泉の流

温泉はあれど六月寒き深山哉

温泉の瀧

温泉も涼し我はた走る瀧の月

日光中禪寺

あら涼し四十八湖を渡る風

同日光(二句)

蚊も喰はで慈悲心鳥の鳴音哉

日は更に月もかゞやく山涼し

うちみの瀧

ことによし裏みて潜る夏の瀧

室の八しま

煙たへて久しき宮の茂り哉

親しらず

親しらば通さじ夏の海ながら

甲斐しら根

百里來し甲斐有夏のしら根哉

禪林家

心すむ水有うへに夏の雨

禪林

降にあらず消ゆるにあらず夏の霜

白山奉納

神の杵雪の麓に茂りけり

江の島

嶋涼し汐うちあはすうへの月

戸隠

此山や夏のさくらに夏の雪

浅間

夏は猶もゆるか雲の浅間山

殺生河原

暑き日や蝶鳥落て石黄ミ

留別(二句)

炎天のくるしき數を便りせむ

風薫る所くゝに寐て行む

或人を訪ひて

風薫る奥の木立は何くぞ

越の雪鵜の邊なる斧久の日光に

住けるを尋て

夏は猶思ひ増らん雪のしま

日光にて身まかりける大路をい

たむ

なき跡に散るわくら葉を見る日哉

半化坊發句集 下

初秋

何となく秋も一日過にけり

とく起て鼻ひる僧や今朝の秋

深井にて

秋立や店にころびし土人形

秋もまだそことしわかぬ夜也けり

七夕

今宵なくば石ともならん二ッぼし

年くゝに思ひ増らんわかれ星

またるればまたるゝもの歎はしの戀

星の戀空には老もなきやらん

偽の世にまつられて二ッぼし

灯籠

切籠消えてあなめくや草の原

露わけて切籠結ぶやうなひ松

夕晴や切籠提行京の町

玉祭

夢に見るも魂棚近く寐し夜哉

有時はあるのすきみにして、

隔りがちなうち、世を去し

妻の塚に詣て

腹立る顔でも見たし玉祭り

送り火や埋れぬ石のまだ煙る

柳亭を訪ひて

息災な我も來にけり玉まつり

かのなき魂ならばかへらんと

詠ける、あはれなど思ひ出て

死なで歸る此夕暮に連の飯

蟻の來るばかりぞ墓の瓜茄子

朝顔

葬や手拭提し花見達

土に這ふ朝顔は猶哀なり

朝顔や淋しう寐れば起安く

朝顔や同じ心の友も來ず

〔芭蕉堂三代集〕は此句を著

虬とす

湖までは朝顔だにも見ざりけり

萩

枝に葉に花の付たり雨の萩垣荒て犬踏分る小萩かな押花となれり猪の臥野邊の萩捨石に花うつ萩のゆふべかな散にけり咲にけり萩の動くうちに

旅行

萩はらや花身に付けて分出る

萩

萩の聲舟は人なき夕べ哉波越や雫ながらに萩の聲

薄

朝あけや薄がもとの道者笠半散る尾花吹やむ月夜哉取付て地に付鳥や薄の穂

木槿

露の木槿おもへば朝も哀也彌宜達は何観するぞ木槿垣

艸の花

雨の野や人もすさめぬ女郎花折て見たり捨たり道の艸の花山もとや馬脊の中に艸の花武蔵野や雲に咲入る艸の花

露

しら露やうつくしき夜と成しより椎の葉に露のみ盛りし旅寐哉谷陰や草より下の松の露露ちるや桂の里の白の音

霧

傘さして霧分行や山法師朝霧や濡て起行野邊の駒舟漕や薄霧洩るゝ火はいづこ

稻妻

稻づまや静ならざる秋の空稻妻やよく寐る人の草まくら

秋風

秋風や酒の過たる顔もなし

星多き夜はつよからず秋の風

秋風や山邊に動く火の青き

松杉の常盤も秋は秋の風

鳥羽の浦に至りて

秋風や浮身を波に走りがね

秋風にしら波つかむみさこ哉

秋風や蟹の呼聲械の音

あふむ石にて

秋風やうきはうつらぬあふむ石

虫

埋もれて啼や芥のきりくす

いとど鳴地を吹にけり夜の風

折くや藻に啼むしの聲沈む

月消へてむしはあらしの下音哉

羅生門の邊にて

簀虫の鬼の子も見ぬ九條哉

雁

月ひらく落来る雁の翅かな

はなれじと呼つぐ聲歎闇の雁

仰向てまづ風情也雁一羽

あれほどにひとしきもの歟天津雁
天津雁小田に見る日は亂れけり
夕暮や啼過る雁小田の雁
初雁の瘦て餌をはむ磯田哉

稻

風流も先是からぞ稻の花
見ぬ人のためにもなるや稻の花

湖のほとりにて

植たしや稻葉によするさゞれ浪
見人もなき月の田毎を刈身哉
夜田刈や明て休らふ身でもなし

瓢

今朝からは土に付けり種ふくべ
蔓ながら瓢を叩く童かな

月

けふの月空はかぎりもなかりけり
明月や座頭の妻のかこち顔
海原や目のをよばぬを月の隅

良夜の雨

月こひて雲も百度見る夜哉
恨まじ月の桂の花の雨
今宵なれや月にむかふも月の上
名月や入山までもたどりつく

阿漕が浦にて

月に猶哀あこぎが海の底

再び此浦に來りて

十六宵も月に阿漕はなかりけり
十六宵や山にむかふて眠るうち

野分

戸明ば月赤き夜の野分哉
海山の中に野分の庵り哉

砧

吹すれる竹の奥なる小夜砧
薄月や水行末の小夜ぎぬた
松風やきぬた幽に谷の里
浪高き夜や衣うつ鰯が軒

客中

身のうへも人にまかせて砧かな

川鹿

つたひ來し石の下より啼^な鹿
聲かはす^な鹿隔る早瀬哉
釣人にならびて川鹿聞夜哉

鹿

啼止て鹿ニツゆく谷間かな
岩端にいとゞやつれて雨の鹿
山里や軒に來て啼夜半の鹿
聲絶て足音近き小鹿かな
數十足峰越ゆくや^な鹿の鹿
見廻して又啼にけり月の鹿
山はなやたちかへりつゝ鹿の鳴
こがれ來て水にも入や谷の鹿
啼絶て鹿のつくばふ夜明哉
小男鹿のよび下る月の尾上かな
耳立て啼音にむかふ男鹿哉

鳥

秋も(は方)猶鳴のゆふべぞおもはるゝ

うづら啼野を走りけり赤鼠
木つゝきや何の味ある山木原
百舌啼て風腥き木の間哉
日のさして鵲の顰見る葉裏哉
風に猶あとなき鵲の印かな

雞頭

雞頭は動きもやらす臼の音
雞頭や種のためとて打たゝき
雞頭に秋の哀はなかりけり

菊

菊の日や盛りは後の事ながら
千世を経し古根も有らん谷の菊
作り倦て今年は菊の山路哉
菊の酒醒て高きに登りけり
綿とれば菊となりたる朝かな
一尺の菊の花見る浮世かな
むさぼらぬ花の價や市の菊
酒瓶に興じ入けり菊の花

後の月

十三夜と見初しもかくの空ならん
我衣に洩る思ひ有り後の月
後の月水を束ねしどきかな

木質

雨毎に澁や抜なん柿の色
青柿の落盡しけり谷の坊

亭生のうらなしと詠る邊にて

有なしの實にも齒のなき翁哉
秋の暮片枝の梨も落盡す
守人なき木の實はみけり山鳥
我ために椎を器にもる山家哉
壽山亭にて

露時雨

命永き樹や殊更に實を結ぶ
露しぐれ時雨し跡の照る日哉
折さして枝見る猿や露しぐれ

秋雨

秋雨やけふ菰穂の鉈作り

或寺に老僧の佛彫居けるに

秋雨に焚や佛の削り屑

西山亭に遊びて

秋雨や追出す晝の濡鼠

紅葉

紅葉ゞや雲の下てる高雄山
紅葉見や顔ひやくと風渡る
紅葉散て竹の中なる清閑寺

長岡に至りて

長岡や蔭行我をてる紅葉
山里や烟斜にうすもみぢ
水鏡江やうへは杵の薄紅葉
ほの見るや岩にかゝれる薦もみぢ

さし出の磯

黄昏や水にさし出のうす紅葉

雑

むら端や黍がら折て風さはぐ

穗屋の祭に至りて

御射山やきのふは薄けふは里
刈萱はまことに秋の花なるぞ

石 燈

雲霧の袂に入や雨降山

磯邊に至りて

穂並よき秋に鶴閑宮居哉

酒折の宮もほどあらざれば

火ともしの神もめづらん月今宵

永き夜や目覺ても我かげ斗

艸の實や空しく土と成ばかり

卯辰山麓にて

花の香や桔梗にうつる人通り

飛鳥山

秋の日やたることなくて飛鳥山

卯山眺望

山もとや櫻にかゝる秋の雲

角田川

聲も立ず野分の朝の都鳥

行秋や見歸れば舟の跡もなし

留別(二首)

名残多し秋もよし田を出る時

散にけり柳結ぬる時なれば

夕雨や奥野ゝ里の荭艸

(夏季たるべし)

刺 髪

剃捨る白髪に露のうく口哉

髪を剃して間なきに

別れ敷のつよくさしけり捨坊主

終に身を啼破るらん秋の蟬

旅 行

草臥て月にも啼す旅鳥

布施の海

いにしへも月いにしへも布施の秋

築小屋の火にもならぶや溜り水

越中島貝井

只ならぬ蹄の跡や水の月

南坡庵を訪ふ

おもしろき庭や花野の中含り

けふや仲春下のまねきにしが

ふといへ共、眠るのみ餘事なけ

れば

木兎や何きゝためし事もなく

(芭蕉堂三代集)此句を冬之部に組入れたリ)

留 別

便ふん月に二見の硯石

過去し素然、夢に發句を語ける

に

なき人の發句きゝけり秋の雨

小町有り式部ありて、をみな

才ある國なりければ、今もまな

ばとんぞおとる事のあらじと

見へ婦人に送る。

筆取て千艸の花におくるゝな

秣月亭にまねかれけるに、酒は

常の産にして、菊は主じの愛す

所なれば

流るゝも酒の泉敷菊の奥

高野尾村にて椿の直なるを見出

し、主じに是を望むに、こゝろ

よくあたへければ

杖に切て實は捨て行椿哉

鼓が浦

くれ行や鼓が浦も秋の聲

斗雲庵にて

秋風や川邊の庵に老二人

東溪亭にて

枕して紅葉見初るうらの山

冬

時雨

朔日や日の有うちを夕時雨
初しぐれ日にふれ身にもふれにけり
驚かぬ綱引のさまや初しぐれ
時雨ゝや角まじへゐる野べの牛
時雨ゝや竹かつきゆく鳥羽縄手
時雨ゝや牛に付たる油筒
行雲のはし亂つゝ、初しぐれ
土山や唄にもうたふはつしぐれ
神祇釋教といふ題にて（二句）
御首てる正面通りしぐれけり
しぐるゝや宮に兀たる鬼女の面

風

こがらしや日の鼻の地に羽うつ
木枯の中に静けき朽木哉
木がらしや西山淺く夕附日

枯野

かれくし野中に松のあらし哉
枯て猶清き野守が鏡かな

冬木立

捨果し景色でもなし冬木立
此うへは折るゝばかりぞ冬木立
雲起る谷の上なる冬木立

炭

きりくす振落しけり炭俵
何事もいはす炭賣翁かな

千鳥

聲立て水を走る千鳥哉
住なれし人はよく寐て小夜千鳥
貫之のうき旅ゆかし啼ちどり
聲かれて朝日に眠る千鳥哉

水鳥

水鳥や何はなくとも夕ながめ
浮麻鳥岩に身をうつ夜もあらん
月澄や音なき水に浮麻鳥

霜

霜満て竹靜なる夜也けり
初霜の木に葉撥（撥力）搜し百舌鳥の啼
山里や焚木の霜のもゆる音
赤くくと霜氷りけり蕎麥の莖
橋の霜誰が落してや炭二ツ

妙義山

白雲や麓は岩に霜柱

岩鼻にて

霜氷る岩の下道踏目かな

四條川原にて

ならはせや霜夜を駈く薦かぶり

水

更行や水を渡る獺の聲
折沈む竹のうへなる氷りかな

砥澤

如くだく上は氷の砥山かな
氷りけり實のらぬ稻の臥しまゝ

我門にひとつの駒を得たり。千
里の行先を籌く。

氷にもおくれはせまじ駒の聲

衣が崎に至りて

かく見るは氷らぬうち敷浪の不二

諏訪湖

不二見んと氷に立や諏訪の海
星きら／＼氷となれるみをつくし

雪

白妙は遠山而已ぞ小雪ちる
薄雪やまたかたちよき家の松
所／＼雪の中より夕けぶり
おなじ色を重／＼て雪の山
更行や雪に羽叩く鳥の音
田のうへを啼迷ひけり雪の雁
住ばすむ事ぞ谷間に雪の里
沈みほとは積らぬもの敷雪の舟

猪の倒ふしけり雪のはら

角振てあゆみもやらす雪の鹿
雪ちら／＼日に降暮て月に降

此ために根はしがらむか雪の竹
北山は小雪散らん軒端吹

夕暮や雪を抓て枝の鳥

北の雲黒きより雪の降初る

見るうちに降うしなふや雪の梅

曙や所／＼に雪の塔

舞扇雪にかざすや下川原

日頃見し松も深雪の高根哉

其雄に訪れて

踏分て何見る人ぞ雪の山

文鶴亭にて

閑さや垣の外なる雪の舟

留別

驚てたつ日も遅し雪の山

安田の綱渡りにて

降ふるや雪をたぐりて渡し守

鉢叩

いかならん祖師の心ぞ鉢叩
鉢叩月下の門をよぎりけり
竹買に來た親父也鉢たゝき

臘八

臘八や今に迷ひを傳へつゝ、
臘八や仰向ばはや星もなし

冬の月

たゞひとりする景色や冬の月
寒月や狐なが啼地に倒る

車蓋が舞戸を叩きて

寒くとも戸さすな庵の松の月

雜

枯蘆の日に／＼折て流れけり
かれ／＼や竹の中なる草の莖
歸り花一輪をしむ薪かな
更行や机の下の桐火桶
こつ／＼と嘆する人や紙衾
檣やことにをかしき野夫の様

日影もる壁に動くや冬の蠅

矢田の橋の邊にて

冬の野や何と臥べき艸の莖

素然一周忌に

廻る日や雪の格に泪そむ

留別

語り足らぬ朝戸出寒き山邊哉

一婢亭

氷柱なき軒にふたゝび入日哉

或る宿に立よりて

舍りうれし時雨乾かす我衣

甲斐より信州へ越る

數十丈見上れば岩の垂氷哉

一本岩又は天の柱ともいふ所に

て

雲かゝる天の柱の冬木だち

神無月廿日あまり、故翁の湖東

行脚の跡を慕ひ、日野山の邊を

過るに、割れたる身には碯の聲

哉と聞へしも今はむかしに

て、目出度御代のしるしなるに

や。山も岡となり、林も畑とか

はりて、しら波の煩ひもなき折

から、紫莢亭にいたりて、暫く

時雨をはらす。

剝れざる身に冬しらぬ舍り哉

臘月曾陸亭をとぶらひはべるに、

よろづまめやかにて、日もゆふぐ

れになりければ

かへらむとおもへば寒しやまの庵

雜之部

目もたゆし白雲動く不二の形

つゝしまん物閑山も軒近き

江島

去がたや夕日の不二に汐がしら

中嶽

つくく」と岩立神の杉間哉

日光

日面も日うらも照す宮居哉

不斷樓

咲ば散散ば咲つゝ此さくら

上諏訪

俯向て聞やふしきの神の数

七面奉納

月花に神も數有面かな

善光寺

よこれたる我にも法の光りかな

杖突坂

歩行にせん杖突坂のためし有

送別

旅はさぞ土に臥日も有ぬべし

金洞山

雲埋む岩木の下の旅寐哉

或人の宿にて

木に草に花も實も有舍り哉

車蓋、三聖の像を彫て、開眼の

句を乞けるに、故翁の吟をおも

ひて

月花の道守初ん聖達

客中

雲水やよろづに心とゞまらず

板

天飛や雁の翅の我にはあらじを、針目衣引つくろひ、武藏野の月見まく、秋風
たち初る頃よりおのがすみ所出て、式しまの流波こち／＼の人／＼を驚かし、
一夜二夜と日をなんへにけり。こゝはも我大人十とせ餘り先に枕曳給ひけると
なん。そが時書給へるとの葉ども見るにあやに、あやしきまで雅かに、艸／＼
のさまありしを、こと／＼にかひしるして、立歸る波の磯つたひ、栲嶺巾の白子
なる宮崎氏に立よりて、そを白地に語に主じ早く近頃の作をも集め置ければ、
よろこほひあはせて櫻木にえりぬ。おのがともがらは見るともあかめや。

江戸、橋本、芝

半化發句集	役編 車蓋
半化文集	未刻 全
俳諧世説	半化房室
天明七年正月吉日	御幸町姉小路上町
皇都書林	菱屋孫兵衛
	三條御幸町西入町
	菊舎太兵衛
刻合	